



TITLE:

雲崗便り

AUTHOR(S):

小野, 勝年; 日比野, 丈夫

CITATION:

小野, 勝年 ...[et al]. 雲崗便り. 東洋史研究 1940, 6(1): 67-69

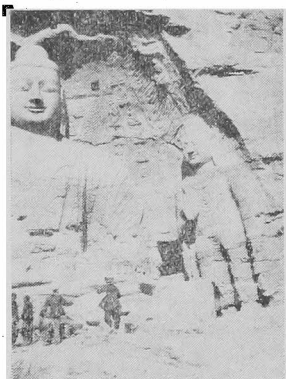
ISSUE DATE:

1940-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145718>

RIGHT:



せられた書目・書志は、靜嘉堂文庫所蔵のものを主としてこれに著者、東京帝大、麓保孝氏の蔵書を補つたとのことで、今年刊行のものまで至極克明にとり入れられてあり、總数は六百をこえてゐる。この數は『書目長篇』所收のものより少ないが、これは取捨の標準の異なるためと、他書目よりの轉錄をせず全部を實査によつたためであつて、缺漏の多いことを意味するものではない。

而してこれらを史志附現存目、郡邑志、官藏、圖書館、學校、家藏、勸學、讀書題跋、專科目、著述目、版刻、禁燬目、徵訪、徵刻、叢書目、引書目、書誌學、叢刻、雜書の十七門に分ち、更に附載として近刊洋假裝本、展覽目錄、工具、本邦編刊のものがあつて、附載以外には、一々解題、序跋及びテキストが書かれ、而してはじめに書名索引が附けられてある。解題には書物の解説のほか、著者の籍貫、字號、時には略歴などが書かれてあ

る。大概は三四行から六七行程度の短いものではあるが、四庫式分類法の模範的なものとせられる『天津圖書館書目』、蒐書讀經の指針とせられる『書目答問』などの解題には數頁があてられてあるのをはじめ、注意すべきものには勿論詳しい解題がある。また參考論文のあるものは、これが擧げてあること、例へば『直齋書錄解題』の項に本誌第三卷附録の索引が擧げてある如く、この點甚だ親切である。

以上が本書の概略である。序文に依ればこれが完成に五年を要したとのことである。實際短い年月には到底なし得られない、苦心の要する仕事である。全般的な解題の完成の一日も速かならんことを祈りつゝ、併せて、書目書誌の今後の刊行のものや日本人編纂のものについての解題を補遺として續刊せられんことをも望む次第である。

(藤枝 晃)

雲 崗 便 り

十一月に入つて雲崗はめつきり寒くなりました。五日には雪が降りました。周圍の山は降り横つた雪で白く、地上の水も日陰は一日中解けません。今日の屋外気温は零下十五度までも下つたことでせ

う。發掘に従事する苦力達も朝は先づ凍りついた表面の土をコツ／＼と鶴嘴で掘らねばなりません。發掘は中央窟前面に南北に亘る二本のトレンチと西方窟前面の東西南北丁字形トレンチが主要なるものです。これと云つて御便りする程のことではありませんが、第九窟の前のみなら

す第十九窟の前にも相當に廣い遼代の輓敷があらはれたことが注意されます。遼代には全體に亘つて大修理が行はれ、窟の前には恐らく大きな伽藍も建築されてゐたのでせう。第十九窟前に於いては岩磐の上には厚さ一尺許りの、北魏時代の瓦の包含層があり、更にその上に遼代の輓敷が敷きつめられてゐました。このことなどは殊に興味を喚びました。露佛の發掘は先月の半ば頃から、掛りましたが、昨今漸くその全貌が明らかになりました。土砂に埋もれてゐた膝部以下二米餘り掘り下げて略々底部に達しました。そこには一面に輓敷がしきつめられてゐます。然し用磚は條文のないもので、新しい様に考へられます。

本尊は兩側の岩石の状態などから考へて、これが最初よりの露佛ではなく、やはり以前から推測されて居た様に石窟の中に鑿たれたものであることも確認され、その窟のプランも漸次判つて來ました。土中からは上から崩れ落ちた大小の岩石が無数に出て來ました。佛像の刻まれたものもありますが満足なのは見當りません。膝部次下を掘り出された露佛は

流石に堂々と大きく、均勢の美も、と、



常瓦蓋蓮の土出

のつて雲崗石佛中隨一のものとうなづかれます。しかし發掘された部分は風化の跡も激しく、かうして露天にさらされるに至つた上は今後保存策を考へる上に於いても問題となるでせう。左脇侍も脚部から臺座まで現はれました。頭部の大き

いの比較して身體の短かい雲崗の佛の中でも特別にその特徴が著しく出てゐます。このことなども洞窟中に於て彫刻されたものを外部から眺めるので目立つ譯です。猶露佛の光背部にうがたれた幾つかの梁孔が、示す建築狀態などに就いては如何なる關係にあつたか等といふことは、未だ明確にされないが、今後の發掘に依つて若干知り得るのではあるまいかと期待されます。先月の三十日でした。西部臺上の畑地を發掘してみました。前からも漢式土器片や北魏瓦が散布し、往居址、尠くとも北魏時代の寺院址には違ひないと思つてゐた所です。今度地下七八寸許りのところから、長さ四尺幅二尺位の敷石の様な切石が出たり、一面に瓦があらはれたりしました。こんな浅い所に千五百年前の遺蹟が未だ痕跡を残し乍ら埋つてゐるのかと思ふと不思議な位です。土地の百姓達はたつた五六寸の土しか鋤いてゐないわけですね。我々は彼等のズボラさ加減を嘆ひました。それでもやせた蒭麥がついこの間刈りとられるまで黄色い穂を風になびかせてをったものでした。そこからは漢式土器と

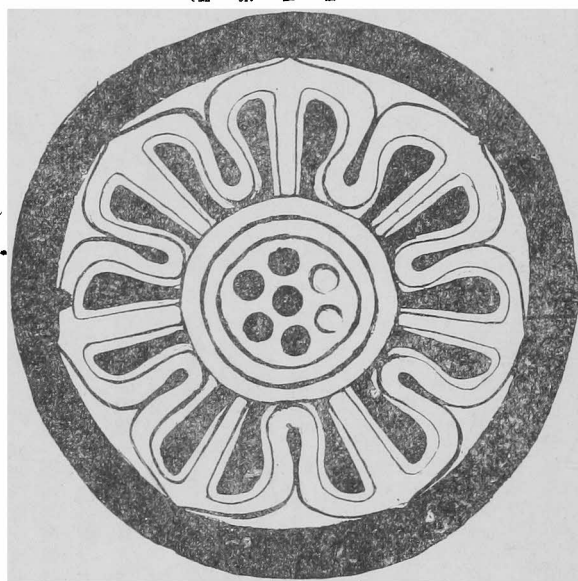
は違つた大同附近に多い所謂北魏式土器片も出ました。中で最も面白いのは、この蓮瓣模様の瓦當が出たことです。雲崗では北魏時代の瓦當は傳祚無窮の四字のあるもの

ゝ外はまだ發見されてをりませんが、したが、待望の蓮

華文のものが遂に發見されたと譯す勿論石窟の裝飾に

度々使はれてゐるこの向日葵の様な

形をした特徴のある蓮瓣は極木瓦として一度ならず發見されてはゐますが、瓦當としては全く最初のもののなのです。残念なことに此の瓦當は完全ではありま



(黒が分部い、白が分部い黒)

せん。然しこれに依つて當代の簡素雄勁な手法の窺はれる一例が知られたのです。傳祚無窮の瓦當のつぎかたは漢瓦の場合に反して、筒部に對して鈍角をな

して居ま

すが、これも同様若干のそりを持つて居ます。筒部の表面は

篋の痕、裏面は布

目が現はれて居ます。これと同時に

使用された平瓦は傳祚無窮

の場合と同様、矢張り例の指押形波狀文のものではなかつたでせうか。未だ確言することは出来ませんが、そんな様に解せられます。實は西部臺上の發掘は一日

行つたのみで、或る事件の爲に已むなく中止せざるを得ませんでした。然し、もう少し徹底的に調査する考へです。其の際、又面白い御便りが出来る様にと心弱かに願つて居る次第です。

(夜間の徒然なるまゝに、蓮華文瓦當の復原を試みました。石窟の天井部に現はされたものには花心部に蓮子がありません。假に描いてみはしたものの、或ひは今後の發見に依つて蛇足に終るかも知れません)

十一月七日

雲崗石佛寺にて

小野勝年 日比野丈夫

この印刷中に、小野氏より次の如く蓮瓣瓦當の訂正を申し越されたので附記する。

*

雲崗も此の數日來存外に溫暖です。露佛の發掘も漸次進みつつありますが、實測圖や寫眞撮影と云ふ様なことで恐らく今回は終了に至らぬかと存じます。西部臺上では北魏琉璃釉瓦片が出て來ました。先般の復原は蓮瓣瓦當破片出土で訂正します。中の線が一本であること、中央に實がないこと。

十一月廿二日、小野 勝年